大正琴

小橋博史

東京新聞出版局

〈著者略歴〉

昭和三十一年上半期「落首」、同三十七年下半期「火と土と水の暦」がそれぞれ直木賞候補に。著書「大納言秘帖」「加藤清正」「落首」（時代小説代表作選集収録）「火と土と水の暦」「砂の上の城」など。ほかに新聞連載小説、ラジオ、テレビドラマ作品多数。日本文芸家協会会員、新鷹会会員、中日新聞記者、名古屋市在住。

花の大正琴

昭和五十三年十月二十日　第一刷発行
昭和五十三年十一月二十日　第二刷発行

著者　小橋博史
発行者　真野義人
発行所　東京新聞出版局
東京都港区港南一ノ三ノ一三
中日新聞東京本社
振替口座（東京）五一五四九七
電話　〇三（四七）一二一一（代表）
〇三（四七）二四四三（直通）

印刷・製本　図書印刷株式会社

©1978　HIROSHI KOBASHI

花の大正琴　目次

仏と妓の町 7
花火 16
女たちの地図 29
春の潮 47
男たちの構図 59
少年の風 72
音の陰明師 85
黒の図式 98
竹取り拾遺 106
日輪 111
奈落ぶし 124
紅蓮雲 137
妖花 150
青雲譜 165
伝説の海 179

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

雲の流れ 196
おんなの夏 212
誘蛾灯 228
異国の塔 241
風媒 255
お祭り男 281
向日葵 295
回り舞台 309
秋の序曲 327
蜜の城 340
音の罠 352
歳月 363
夏の祝祭 375
花道 389
春の峰 400

裝丁　風間　完

花の大正琴

仏と妓の町

好色とは違う。

これは、もう、癖なのである。

たとえば、欲しくなくても、つい煙草に手がのびるのと同じであった。

それも、ひる日なかなのである。名古屋の大須。観音さまの巨大な本堂がすぐそこに見える旭遊廓、吾妻町の一角。

ぎらぎらした真夏の太陽が中天にぴたっと止まった正午すぎ、思いがけなく階段をかけ上がってきた男に、女は、

「またなの？　あんた……」

あきれたように、口の中に入れた真ッ赤なほおずきを窓の外へペッと吐いた。この男は、ゆうべもやってきたはずだった。旅館森田屋の長男銀治である。

銀治は息をはずませながら、ものもいわず十銭銀貨を一枚、女の手ににぎらせた。

妓楼にとって、この時間は、当然、夜のための休憩時間である。が、銀治は夜まで待てないのであった。手持ち無沙汰なのだ。

「はよう、しやあァ……」

と、みずから布団を敷いて女を促した。

「暑いのになァ……」

女は、しょうことなしに、桔梗もようの浴衣をぬいだ。甘酸っぱい女の体臭と共に、大柄な白い裸身が惜しげもなく、銀治のわきに横たわった。そして、うちわでパタパタと胸のあたりからお腹にかけてあおった。

大きな乳房がそのたびにゆれる。

いそという。二十四歳。金波楼の娼妓である。色が思いきり白く、鼻が高い。髪はやや茶色がかっている。混血だというふれ込みなので、すごい売れっ子である。

習慣とか癖で女を抱く男は、一種、軽快であった。手順を間違えないのである。そこには陰微な口説や手間ひまかけたたわむれも必要ない。

汗のしみた敷布団一枚の上へ女を抱き寄せ、もう、いきなりもつれ合うのだった。

商売女も、このほうがよかった。ほんの短い時間、軽く声を上げるだけで、男はまたたくうちに果てる。その上、銀治は若い。二十一歳だ。

「おまン、うちの仁三郎を知っとるそうやな……」

ふと、脈絡もなく、銀治は女の身体の上で訊いた。こんなことはめったにない。

「仁三郎さん？　ああ、あの坊や。知っとるよ」

銀治の顔色が変わった。オヤ？　と思うほどの変わり方である。仁三郎は銀治の弟だ。

ふいに、いそは笑った。「あんたァ、やいてンの？」とまた笑った。

すると、銀治の胸に突然、黒いものが大きく動いた。

「ばかばかしい。あの子、やっと十四よ」

突然、銀治は力まかせに、いその身体を開いた。銀治は、七つも年下の弟に、いま、黒い嫉妬の炎を燃やしていた。

「あんたァ、バカしないでェ……」

銀治はものもいわなかった。癖と習慣で女を抱く男が、急に変貌していた。いそは、男の嫉妬が、このような形で男自身をけしかけることは、長い習慣で充分に知っていた。

すると、ふいに燃えた。

奇妙な錯覚があった。いま、いその脳裏をさわやかな少年の影がよぎった。十四歳の仁三郎の影である。

（わしとこの、あんちゃん。きとれせんかァ……）

と、つい、おとついも、その少年が金波楼の裏口で下働きの女に尋ねていたのだった。（どこの子？）といそがきくと（森田屋の子やぎゃァ……）と下働きの女が答えた。あの子が、銀治の弟なのか。この男とは似ても似つかない利発そうな子だ。汚れた女は、汚れない男、それも少年にあこがれた。そのあこがれが、錯覚となって、銀治を抱く手の力になって加わった。

さらに燃えた。不用意な声を上げた。その声に、いそは、自分自身でおどろき、われに返った。汗が全身にわき、銀治の汗と、ぬめぬめと、もつれあい、布団をぬらした。

ミシッと小さな音が階段のほうでした。

「損した……」

と、いそは声に出した。

「なんじゃ、それは……」

銀治は道楽者の顔に返って、いその身体から降りた。いそは、そのままの姿勢で、てれかくしのように、ま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た、くすくすと笑った。
「ほんきになって、損したといってるのよ」
「……」
「商売してて さ、いちいち、ほん気になってたら、身がもたないよ」
「ふん」
銀治は、仁三郎のことを忘れていた。ちらっと、横にいるいその豊かな乳房と腹部、さらに、なだらかに流れる下腹部のほうへ目をやった。いい女だ。二十四歳。使いからされている女にしては、身体がくずれていなかった。その女が、はじめて燃えてきたことが、癖で女を抱く銀治にもはっきりわかった。
また、ミシッと階段が鳴った。
「だあれ？」
と、いそは仰向けのまま声をかけた。
すると、いきなり、足元のふすまが大きく開かれた。
「……」
銀治があわてて首をもたげると、
「おい、われ、どこのぼんぼんや？」
と、顔色の悪い中年男が、低くドスのきいた声を落とした。
「……」
「どないなっとるんや、これ……」
男は、ひどくくずれた感じであった。人相がきわめて悪いのである。四十を二つか三つ越えているだろうか。目に刺すような残忍さがあった。
「いそ、かなわんなァ……」
男は、かなわんなァ、という部分を、わざとらしく、かなァんなァという発音をした。
「わいの顔にドロぬってもろたら、かなァん。せやないか？」
この場合、関西弁には凄みがあった。
いそは、男の顔をみると、はね起きて、捨ててあった浴衣を白い裸身にまとった。が、あわててまとったので、太ももの白さが、まぶしく割れ、胸からも乳房がはみ出していた。男は、そこへ目をやりながら、眉をしかめてみせ、
「にいちゃん、表に出てもらいまひょかいな。じつはな、この女、わいのレコなんやがな……」
銀治は、とっくにちぢみ上がっていた。道楽者だが、たかだか、宿屋のせがれで、親の金をくすねての遊びであった。このような相手とのつきあいは一度もなかっ

た。

これは、あきらかにやくざだ。くたびれたちぢみの着物にへこ帯。ふところに匕首(あいくち)でも隠しているに違いない。それがいまにも腹へ突き刺さってくるような恐怖を感じ、着物を着ようとする手がふるえ、帯がきっちり結べないのである。

「しゃんとせんかいな、色男……」

金波楼の表は通りになっていて、白い午後の太陽が照り返し、横手に細い流れが、わずかな水を流している。

「どないしたろかいなァ……」

男は、弱い動物を捕えた残忍なけものの顔になっている。

「勘忍してちょう。出来心やにィ……」

「……」

男は答えずに、ニヤッと笑った。

遠くで「銀さァ……」という声がした。銀治は生き返ったように、顔色を取り戻した。銀さァと呼ぶのは、母親のりきの声であった。りきは、いつも、この廓の中を「銀さァ」と呼び回るのが日課になっていた。馬鹿な息子が、店の金箱からぜにをくすねて女遊びをしている。それをやめさせる手だてはこの「銀さァ……」と大声で呼び回る方法しか考えられない女なのであった。

「かあちゃん、こっちゃやァ」

銀治は、ありったけの声を出した。それは、まるで、悲鳴に似ていた。りきは、その銀治の声のするほうへ走った。りきのうしろに、銀治の弟の仁三郎の姿が見えた。

俥宿に人力車夫が二人、のんびりとこの様子を眺めている。

「あれ？……」

りきはけげんな顔になった。銀治の前に立っている男は香具師の杉本だったからだ。

ほんの一時間ばかり前、森田屋に旅装を解いて出かけたばかりなのである。

「銀さ、なにしとるンや」

「……」

杉本は、バツの悪そうな顔をして、

「かなァんなァ、おばはん……。おばはんとこのぼんぼんかいな。この色男……」

といった。

「なにかしやあたか、銀さ……」

「……」

仁三郎は、ちらっと金波楼の窓を見上げた。そこに、いその白くふくよかな顔があって、こちらを見おろしている。

「このぼんぼんがな、わいの女と寝てもうたンやがな？」

「え？……」

「わいの女を寝取ったというこっちゃ。そやさかい、おまはんたちの出る幕やない。やくざの女を寝取るぐらいの度胸のある男や、ここで勝負せんと、わいの顔が立たんちゅうこっちゃ」

りきは、びっくりして、

「銀さ、ほんまきゃ？　え？」

銀治はふるえながら、すがるように、

「わし、知らんかったンや、知らんぎゃあ、かあちゃん。そんな女とは夢にも思わなんだ」

笑止であった。銀治はもう、見るかげもなくおびえている。

それを見ていると、十四歳の仁三郎さえも次第に腹が立ってきた。

「おっさん……」

といった。

仁三郎という少年は、どことなく違っていた。森田屋は、父の嘉助、母のりき、長男銀治、長女きょう、そして二男の仁三郎の五人家族と女中たちによって構成されているが、仁三郎だけは、だれとも深い交流はなかった。一人でいることが多いのである。

よそ見にはおとなしい子であった。

が、二十八日の「みょうおんさん」の縁日に出ていた易者が、三人が三人とも、

「ホウ、おもしろい手相や」といった。

「向こう見ずを絵に描いたような性格やな。昔なら一国一城のあるじか大泥棒や……」と笑った。

その「向こう見ず」な性格が突然、顔を出したらしいのだ。

「おっさん……」

「なに？」

杉本は、この小僧、なにをいい出すのか、と身がまえもしなかった。

「あのひとは売り物と違うのきゃあ？」

「なに？」

「買うとるのは、うちのあんちゃんばかりやないぎゃあも……」

「なんやと、小僧」

杉本は、みにくく、くちびるを歪めた。
仁三郎は、澄んだ目で杉本を見つめていた。この男のいいたいこと、要求は、目に見えている。兄の銀治をおどかし、なにがしかのお金をせしめようというのであろう。
「小僧、われが出る幕かい。あっち、いきさらせ」
といいざま、杉本は仁三郎の横っ面を張り飛ばした。が、その手は仁三郎の顔に当たらず、空を切った。あ……と思うまもなく、小さな仁三郎の身体が軽く沈み、右足が、杉本の股間をすばっと蹴った。
「うッ……」
杉本はうめきながら、その場にくずれた。息がつまった。蹴り上げた仁三郎の右足は、深く下腹部へめり込むほど強烈だったのである。
この咄嗟のできごとに、銀治のほうがおどろいた。あきれて声も出なかった。りきは「仁三郎……」とおろおろ声を出しただけだった。
その場にしゃがみ込み、うずくまった杉本は、乾いた熱い大地をしばらくのたうち回った。
「かあちゃん、戻るよ」
仁三郎は、けろッとした声を出し、すたすたと歩き出した。俥屋の車夫がぽかあんと森田屋の三人を見送るかっこうになった。
銀治とりきは、なにがなんだかわからなかった。ときどき笛を作って吹いたり、古い破れ三味線を取り出して、ポツンポツンとつまびきをしてみせたりするだけのおとなしい子が、やくざと渡り合ったのだ。
その上、あッというまに相手を倒す手並みを見せたのだ。
が、このまま、事件が解決するとは思われない。必ず、杉本が報復にやってくるに違いない。
「どうするやあァ、仁三郎……」
銀治は、前へ進む仁三郎におそるおそるたずねた。
「みょうおんさんへいくぎゃあ」
「みょうおんさん？」
なぜ、みょうおんさんへゆくのか。
みょうおん——正確には「明王」である。
あすは、この「明王さん」の縁日なのである。大須観音の東、大光院の境内にあるのが明王殿である。守り本尊がすべてのけがれを取り除くということから、婦人病にご利益があるとして、古くから有名なのである。
森田屋は「みょうおんさん」の裏にある。

その、明王さんのある大光院へ仁三郎は、すたすたと入ってゆき、

「桝田組の親分さんはおりゃあすきゃあ？」

といった。

あす二十八日の縁日のために、露天商たちが境内にたくさん集まっている。露天商すなわち香具師だ。背中いっぱいに入れずみを彫っている男もかなりまじっている。

「あっちだ……」

戸板、竹、すのこなど店開きの準備をしている男が、仁三郎に庫裡のほうを指さした。

もう一度いうが、仁三郎という少年は、大道易者の判断によると、たいへんな向こう見ずなのだそうだ。一人の易者がそういったのではない。三人が同じ表現をしたのだ。したがって、この少年の内部には、きっとなにかがひそんでいるのだろう。

いま、彼が、なにをやろうとしているのか、母親のりきも兄の銀治もわからない。いや、仁三郎自身も、はっきりわからず、ただ、頭の中にひらめいたことだけを実行に移しているだけなのである。

後年、森田屋の仁三郎が、急激に栄光の座へかけ登っていく過程の中に、このひらめきが、随所に功を奏するのは、やはり、このころの萌芽が大きく枝葉をつけ、左右していたとみてよいだろう。

ところで、みょうおんさんの縁日は一帯に露天商が店を出し、この露商を統率するのは、桝田組の親分井川豊蔵である。

この豊蔵を仁三郎は一度だけ見たことがある。小柄な初老の男で、とても親分に見えない、田舎のおやじといった感じだ。

しかし、いがぐり頭、小さい目、大きな鼻、口などがかもし出す凄みのようなものは、仁三郎にはわかっていた。

「親分さんに逢わせてちょうでえ……」

庫裡の玄関で若い衆に仁三郎は、

「森田屋の仁三郎がきたというてちょうでえか……」

若い衆がはじめきょとんとした顔をしていたが、母親らしい女と、二人の男の真剣な顔に、

「へえ……」

と奥へ消えた。

日が、かなり西へ回っている感じであった。セミがしきりに鳴き、庫裡の前のアオギリの葉がかすかに風にゆ

れる。
「入ってくれといっとりゃあすよ、親分は……」
取って返した若い衆がそういった。
三人は、奥へ通る。
縁側に、井川豊蔵と四、五人の中年男がすわって、西瓜を食べている最中だった。
「森田屋のぼん、なんや……」
「はい」
井川豊蔵は、仁三郎をおぼえていた。この少年は、毎月二十八日の縁日に露商のうちでもとくに大道芸人の前で、じっと立ちつくすのが目立った。コマ回し、手品使い、よされ節うたいなど、いわゆる寄席の色物的な部分に興味があるようだった。
「親分、このぼんぼん、かなあンなあ……」
三味線ひきの女が井川豊蔵にあるとき告げたことがある。ちょっとでも、三味線の調子が狂っていると仁三郎が「違うとるよ」と指摘するのだそうだ。こういうことから井川は仁三郎を知ったのだ。
「それでなんの用やァ、ぼん」
「杉本と勝負させてちょうでえ、親分……」
仁三郎が杉本と勝負したいといったのは、この少年が持つ、例のひらめきからである。
さっきは、奇策のようなもので勝ったのだ。こんど、まともに立ち向かって勝てる相手ではない。
「杉本ちゅうたら、あの大阪の杉本か……」
「はい」
「勝負とは、おまん、おだやかじゃないのゥ。一体、どういうことで、そがなことになったか、いうてみィやァ……」
仁三郎は、井川豊蔵という大物を引き出したいのだ。大物を引き出し、この大物の前で勝負しようというのだ。しかし、わけをきけば、井川は絶対にけんかさせないと計算したのである。十四歳の少年とは思えないずるさである。
「ま、いうてみい」
仁三郎と銀治は、さっき起こった金波楼のできごとの一部始終を井川豊蔵に話した。
「よし、わかった」とあたりを見回し「おい、杉本を捜してつれてこい。ガセねた売りの杉本や」
「へえェ」
と、若い衆がすっ飛んでゆく。
井川は若い衆を走らせてから、急にニヤニヤしなが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com